

旧岡田邸、財団が取得

昭和初期、旭川市中心部に建てられた実業家の邸宅「旧岡田邸」の保存再生を目指す一般財団法人「旧岡田邸200年財団」が12日、土地と建物を取得した。市民から寄付や融資を受け、資金約6千万円を集めた。外壁や屋根を改修し、秋にも新たな形で再オープンする。

(大川諭)

旧岡田邸は清酒「北の誉」を販売していた野口合資会社の社長で、旭川商工会議所会頭も務めた故岡田重次郎氏が1933年(昭和8年)、旭川市5の16に建てた。

敷地約千平方メートル、木造2階建て延べ面積560平方メートル。ステンドグラスやシャンデリアがあり、和室と洋間が隣り合う和洋折衷の建物だ。スチーム集中暖房や各室から配膳室につながる呼び鈴など、当時の最先端技術を導入。戦前には皇族が宿泊するなど、迎賓館としての役割も果たした。

岡田氏の家族が2003年に転居。一時は取り壊しの危機もあったが、保存の意向を理解してくれた京都在住のオーナーが所有。旭川や札幌の企業経営者ら有志が昨年10月、財団を設立し、建物を修繕して活用する「動態保存」を掲げ、賛同者を募った。旭川以外にも全国から寄付があ

公開にも秋に改修し

旭川市民ら 資金を寄付

り、交渉の末、5880万円で取得した。

今後は、7月まで毎月1回、人数限定の一般公開を実施し、並行して外壁と屋根の改修工事を進める。

財団の高橋富士子代表理事は「本当に取得できるか不安だった。皆さんの温かい思いから買い取ることができた。ここから先が本当の再生です。秋には『動態保存』の形で建物を開きたい」と話す。第三者に貸し出すことや、財団がそば店を開くことも選択肢にあるという。

京都で町屋再生を手掛け、今回の取得に尽力した建築家の谷口一也さんは「これが始まりです。外観は古くて汚く見えるが、素材はしっかりしている。78年生きてきた建物をきちんと手入れすれば、また78年生き残れる」と太鼓判を押している。

財団が取得した「旧岡田邸」で、当時のシャンデリアが残る客間



北の国から初メロン
富良野
出

に定植し、昨年と同じ
日の初出荷にこぎつけ